

日米野球の考え方の相違に関する研究
—主にルール、投手、ファンに的を絞って—
井口 亮 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 新井 博

キーワード：日米野球，メジャーリーグ，完投率

1. 諸言

私が日米野球の考え方の相違について研究しようと思った動機は、2013年の読売ジャイアンツ対東北楽天ゴールデンイーグルスの日本シリーズで田中将大投手の登板試合回数や球数についての捉え方が、日本とメジャーリーグでは大きく違うように感じたのが動機である。そこから疑問に感じだすと、2013年の日本シリーズ以外でも、登板回数や球数について取り上げられていたことが思い出され、更に研究の意欲が湧いた。私の思い出されるものでは、2013年の第85回選抜高等学校野球大会で済美高校の安楽智大投手の球数が大会を通じて772球に終わったことでも大きく問題とされたことが記憶に新しく残っている。安楽智大投手の球数については日本でも投げ過ぎではないかと問題になっていたが、メジャーリーグ側の報道の中で1番気になったのが、アメリカの高校生の投手は1カ月に球数が200球をこえることはほとんどないという報道を見て私は驚いた。

2. 研究方法

日米の野球に対する違いが記されている本や論文などを読む。

現役の選手や引退した選手が著者となった本を読み、選手の考えていたことや考えていることを読み取り、日本でプレーしている選手やしていた選手とメジャーでプレーしている選手やしていた選手の考えを読み取り比較しながら考えをまとめる。

3. 結果と考察

日本の野球では先発投手の完投というのは、常に理想として持ちながら練習して試合に臨むことが主流であったが、メジャーリーグでは通常完投する先発投手はおらず、100球前後での交代が普通となっている。それはメジャーリーグの考え方である、肩は消耗品であり大事に使うものであるというのがあるからである。

まとめ

日米間の野球の考え方の相違はいろいろなところに出ているということである。ルールブックには載っていないルールの違いも日本の野球とメジャーリーグで感覚的に違うものである。野球の文化自体に違いがあり、投手の球数制限や野手の連続試合出場も、日米間で考え方が今は違う。いろいろな面が日米間で違いが出ているが、日本の野球がメジャーリーグ側に近づいていっている部分がある。いいところを取り込み、現在の残すべきところは残すという風になっている。このことから日本の野球はまだまだ進化していくと思えた。

引用・参考文献

- 玉木正之 (1991) ベースボールと野球道 講談社現代新書
小西慶三 (2009) イチローの流儀 新潮社
松井秀喜 (2007) 不動心 新潮社